

ポスター発表

224

活動具「フリップ」、その制作方法と活用の紹介ー「楽しさ」と「働きかけの双方向化・多方向化」を目指してー

駒澤千鶴(国際関係学院)

活動具「フリップ」、その制作方法と活用の紹介 —「楽しさ」と「働きかけの双方向化・多方向化」を目指して—

駒澤 千鶴
国際関係学院

〔キーワード〕「フリップ」、「働きかけの双方向化・多方向化」、可視化、楽しさ

〔要 旨〕

筆者は、「フリップ」という小型の掲示板のような活動具を考案し、中国の高等教育機関の日本語の授業に活用している。その理由は「フリップ」を活用すると、「教師⇒学習者」という「一方向的」になりがちな、授業中の働きかけを「双方向化、多方向化」する可能性が確認できたからである。そして、学習者の内面を文字・絵によって可視化することも可能になる。また、「フリップ」は「文字の導入と字形の確認」、「show and tell」、「回（解）答」の一斉確認、「アイス・ブレーキング」等にも使用できる。更に、自分のことが日本語で言えたという「楽しさ」を目指す活動を簡便にし、学習者全員を「より積極的に教室活動に参加させる」ことも可能にした。また、学会発表等において「働きかけの双方向化・多方向化」を提案するためにも、「フリップ」を活用している。

今回はブラジルでの発表を基に、「フリップ」の作り方とその実践について紹介する。

1. はじめに

本稿が紹介する「フリップ」とは、クイズ番組等で回答者が答えを書いて見せる際に使用される小型の掲示板のことである。筆者は身近な文具を材料に、この「フリップ」を自作し、中国の高等教育の現場における活動具として活用している。更に、中国国内のシンポジウム、教師コミュニティ等を通し、この活動具「フリップ」とそれを用いた教室活動の紹介を行ってきた。

授業では、ともすると、「教師⇒学習者」という「一方向的な働きかけ」に偏りがちと言える。そのような場においても「フリップ」を活用することで、「教師⇔学習者全員」、または、「学習者⇔学習者」という「働きかけの双方向化・多方向化」を図ることができる。更に、それにより、学習者も教師自身も日本語を使つてのコミュニケーションが「楽しい」と感じられる授業の実現が可能になる。これが「フリップ」を授業に活用し、他の教師に向けて、「フリップ」を紹介する理由である。

2015年の国際交流基金の「2015年度海外日本語教育機関調査」によると、中国における日本語学習者は約95万3千人であり、そのうちの65.6%が高等教育機関において日本語を学んでいる⁽¹⁾。一方、ブラジルにおける日本語学習者は2万人弱であり、そのうち67.5%が学校教育以外で日本語を学習している⁽²⁾。この点が、前述の中国の状況とは異なる点と言えよう。

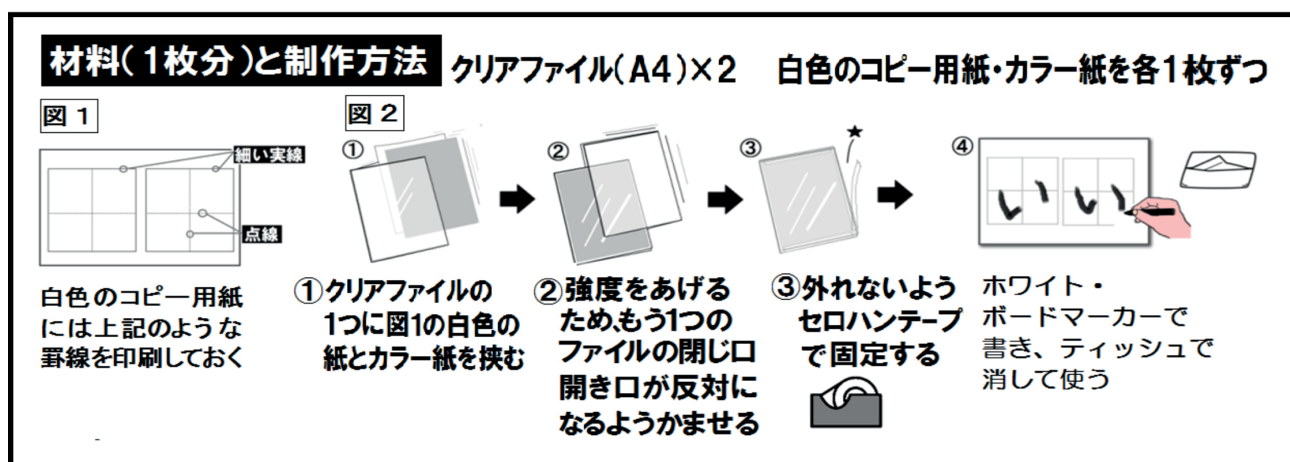
筆者は、日本語母語話者の日本語教員として、15年間、中国の高等教育機関での日本語教育に携わってきた。その間、中国国内の高等教育機関の教師が集うシンポジウム等において「フリップ」の紹介を数回、試みてきた。

「フリップ」は、文字・絵等を用い、学習者の内面を可視化することができる道具である。特に、絵を描くことにより、伝えたいことを表現する活動を簡便にする。なお、筆者は、「フリップ」の活用を「ピア（peer：仲間）と協力して学ぶ（learn）方法」であり、「仲間と学ぶという活動を通して、教室を社会として位置づけ直す試み（池田・舘岡，2007:51）」と定義されるピア・ラーニングを促すものとして考えている。また、「フリップ」の授業への活用を通し、学習者の「楽しい・好き」を活かし、自己表現に結びつけることの大切さを学んだ。

そのような「フリップ」の特性は、中国国内に留まらず、海外の日本語教育の現場においても生かせるのではないかと思えた。そこで、南米の日本語教師からも活動具「フリップ」の実践についての意見を求めたいと考え、「南米日本語教育シンポジウム2017」への参加を決めた。

2. 「フリップ」の作成方法

まず、活動具「フリップ」の材料と制作方法を以下の図1と図2において紹介する。



この「フリップ」に字や絵を描く際には、ホワイトボード・マーカーを使用する。一般的には、黒色のマーカーを用いている。教師が学習者の書いたものに訂正を行う時は、赤のマーカーを使うこともできる。消す時は、ティッシュかトイレット・ペーパーで拭き取る。「フリップ」は、一度制作すれば、1、2年は使い続けられるほど、耐久性に優れている。また、制作も準備

も簡単であるという利便性があり、1つ2レアル（70円以下）程度で制作できる経済的な活動具だと言える。次項では、具体的な使用方法を4点に分け、紹介する。

3.1 文字の導入と字形の確認

パソコンの普及により、手書きで文字を書く機会が減ったこともあり、中・上級になっても、不正確な文字を書く学習者を見かける。不正確な文字が定着する前に、正確な字形を確認する必要があるだろう。「文字の導入」と「正確な字形の確認」の際に、「フリップ」が活用できる。

【文字の導入】

教師がパワーポイントの画面や板書などで導入したい文字を示す。少人数のクラスなら「フリップ」の白い面のマス目に教師が直接書いて見せ、それを模範にしてもいい。学習者は、模範の字を見ながら、「フリップ」の白い面のマス目の中に字を書くことにより、定着を目指す。

【字形の確認】

学習者に誤りやすい文字を書かせ、不正確なところは教師が赤色のマーカーなどで訂正したり、注意を喚起したりする。または、学習者同士が書いた文字を見せ合い、互いに正しく書けているかを確認する。

【期待できる効果】

「フリップ」を使った場合、文字をノートに書くことに比べ、学習者が書いた文字が大きく可視化されるため、教師にとって、訂正がしやすくなる。また、学習者同士で見せ合うことにより、学習者同士による訂正も促されると考えられる。

3.2 文型の産出を「show and tell」に

国広ほか編（2002）によると、「show and tell」とは、外国語教育で用いられる実物教授法のことである。「show and tell」を教室活動として行う場合、一般的には、何か物を持参してくるよう通知する等、事前準備が必要となることが多い。しかし、「フリップ」を活用すると、より簡便な事前準備のみで、「show and tell」の活動を行うことが可能になる。また、「tell」だけに留まっていた教室活動を短時間のうちに「show and tell」の活動に変えることが可能になる。

【今年の漢字】

菅田・駒澤（2016：23）においては、その具体例として「今年の漢字・来年の漢字」という活動が報告されている。この活動は、12月初旬、日本漢字能力検定協会から発表される「今年の漢字」というニュースを紹介した上で、学習者に「自分自身のこの1年を象徴する漢字」と、「来年はこうあってほしいという願望を表す漢字」を書いてもらう。そして、学習者にはその漢字を見せながら、ペアを組んだ相手に、または、クラス全体に向け、その漢字を選んだ理由を説明してもらう、という活動である。このような活動は、学習者の想いを表現する自己実現

を促す活動となる可能性を持つのではないかと考える。

【使役文型の産出】

また、菅田・駒澤（2016：21-22）では、使役文型の産出の際、学習者に対し、フリップにロボットの絵を描いてもらい、そのロボットに「何をさせたいか」ということについて、フリップの絵を見せながら、会話をしてもらおうという実践が報告されている。更に、その実践を行うことにより、フリップを活用する前の会話練習に比べ、発話量が増加し、会話の内容がより個性的かつ学習者の生活が反映されたものになったことが述べられている。

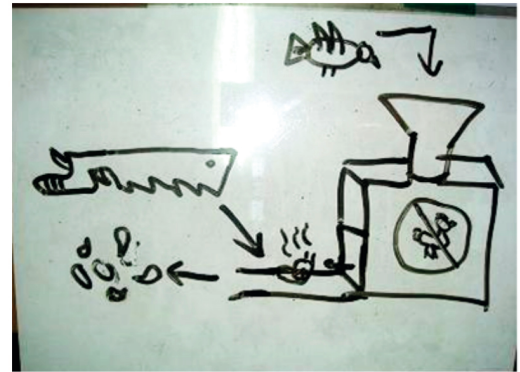
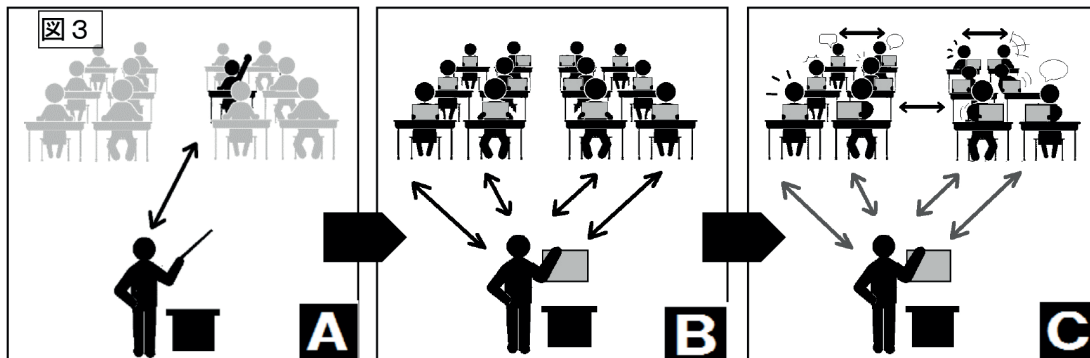


写真1 学生が描いたロボットの絵

【期待できる効果】

駒澤・菅田（2016）は、文型の産出に関する活動を「フリップ」を用いた「show and tell」の形式にすることにより、数回、体験を通して、教師の指示がなくとも、文字・絵等を、より見やすく描こうと工夫をする傾向が見られたことを報告している。また、「フリップ」の両面を効果的に使う、少し折り曲げて使う、2枚合わせて使う等の、教師の想像を超えた使い方を見せる学習者もいたことも併せて述べられている。

3.3 「回（解）答」の一斉確認—働きかけの双・多方向化を図る—



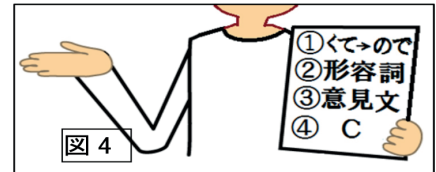
「教師が問いかけ、それに対し、挙手した学習者、または、指名された学習者が答える」。これは、教室で頻繁に行われるやり取りの形式である。つまり、教室には、複数の学習者が集っているにもかかわらず、授業は、（図3a）のように行われることが少なくないと言えよう。

しかし、「フリップ」を活用すると、ほぼ同時に、「教師⇄学習者全員」という（図3b）のような形式がより可能なものになる。また、（図3c）のような学習者同士の「働きかけの多方向化（横展開化）」も自然に促されることが確認できた。図3b・図3cのようなやり取りが可能になるのは、学習者の「回（解）答・想い・考え」などが、「キーワード・漢字・絵」等によ

り、フリップ上に大きく可視化されることによる。

【「回（解）答」の一斉確認において使う】

全員にフリップのカラーの面に回（解）答を書いてもらい、一斉に前方に向け、立てて見せてもらう。答えが分らなかった場合は、白い面に何も書かず、そのまま立てて見せてもらう。すると、「どのくらいの学習者が正解できたのか」、「まだ、理解できていない学習者が、どの程度いるのか」といったことを教師は短時間で把握できる。二択の問題の場合は、「フリップ」に何も書かず、例えば、答えが「aだと考えるなら白紙の面」、「bだと考えるならカラーの面」とし、学習者に「フリップ」を挙げてもらうという方法も可能である。三択の問題の場合は、これに「『フリップ』を挙げない」という選択肢を加えることができる。また、1問ずつ答えを書いていくのではなく、右の図4のように3～5問程度、一度に書かせると時間短縮になる。



3.4 アイス・ブレイキングと振り返りの道具として

【アイス・ブレイキングでの活用】

学習者に向けた授業の最初に、アイス・ブレイキングとなる活動を行う場合、学習者同士の働きかけを促進しやすい雰囲気になることが少なくない。高久（1998:30）によると、アイス・ブレイキングとは、「氷のように固まった雰囲気、緊張感をほぐすことを目的とする活動」とされる。そこで、活動をデザインする際には、その目的を達成できる活動である必要がある。

「フリップ」をアイス・ブレイキングに活用する際には、音声情報に限らず、絵や文字を活用することにより、自己表現の余地を広げる可能性を持った「装置」となる。また、気軽に楽しく行える活動をデザインする上でも役に立つ道具だと言えよう（図5・図6）。

「フリップ」をアイス・ブレイキングに活用する試みは、日本語学習者を対象とする場合にとどまらない。筆者は、中国・北京において、北京日本語教師会という教師コミュニティの運営に関わっている。北京日本語教師会は、北京市周辺で日本語教育に携わる教師や日本語教師を目指す大学院生などが情報交換、技術の研鑽などを目的に集まる自主的な会である。月に1度勉強会が開かれており、毎回、数人ずつ参加者が入れ替わっている。

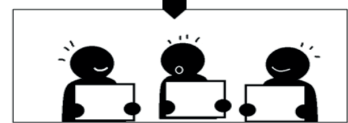


図6



このような参加者が固定されない場で、参加者が自由に意見を出し合える素地作りとして、「フリップ」が活用されている。

「フリップ」を使うと、「解答」、「回答」等を一斉確認できるため、教師（発表者・ファシリテーター）は、学習者（聞き手）の傾向、背景知識などを短時間で把握することができる。また、質問を問いかけ、「フリップ」で答えてもらう活動により、スキーマの活性化を図ることも容易になる（図7）。

2016年9月24日、中国・広東省広州市において、日本語教師研修会が開かれた。写真2は、研修会のアイス・ブレイキングの際に使用されたパワーポイントの一画面である。また、写真3は、参加教師がその指示に応え、ワークショップを通して学んで帰りたいことをキーワードで書き表し、

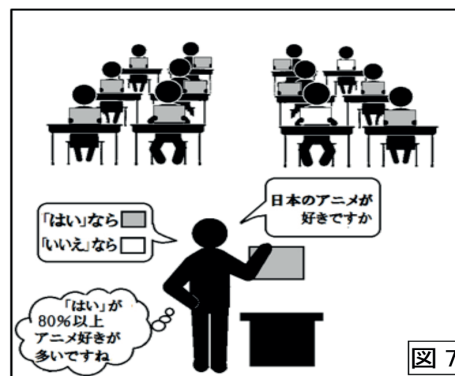


図7

グループごとに共有した際の写真である。

ファシリテータを務めた筆者は、参加者がこの教師研修に参加するニーズは、教授法の研鑽といった方法論に特化した内容が多いのではないかと予想していた。しかし、「フリップ」による共有を通して、筆者の予想に反し、「学習者に授業を楽しんでいると感じてもらうには」、「学習者が授業中により多くの発言をしたいと思える雰囲気作りとは」といった学習者の心理面・情意面を意識した参加者のニーズが少なくないことに気づいた。

このように、ワークショップの開始直後に「フリップ」にニーズを書いてもらい、可視化するという方法を採用することで、筆者はその場の参加者のニーズをある程度、理解できた。それにより、参加者の日常の実践や興味関心に合わ

せた形で、ワークショップを進めることができた。

以上のように授業、ワークショップ、講演会において、開始直後のアイス・ブレイキングで「フリップ」を使い、参加者のニーズを表してもらうことは、「働きかけ」を活性化させる可能性をもたらす。

【ワークショップ、グループ活動の振り返り】

ワークショップ、講演会、研修会、授業においても、その終盤、「振り返り」を「フリップ」で行うことが可能である。「振り返り」は一般的に個人・グル

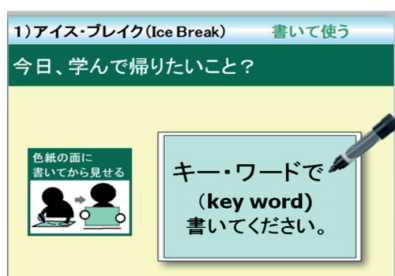


写真2



写真3



写真4

【ポスターセッション】

ープで行われるが、その「振り返り」を全体で共有するとなると、「時間が十分に取れない」、「他のグループの意見や感想が把握しきれない」などの問題が起こりがちである。

しかし、例えば、「振り返り」の内容を「フリップ」上に「漢字1文字で表す」、「キーワードで表す」、「イラストに描く」等の活動を行う。それを携帯電話のカメラで撮影し、あらかじめ組んでおいたsns上のグループチャットにアップすることにより、各グループ同士、または、全体での共有が簡便になる。写真5～6は、実際に筆者の授業で行った「振り返り」の記録である。

このように「フリップ」とsnsの機能を組み合わせると、sns上の画面上でも、クラウドのような形で、それぞれの振り返りを記録しておくことが可能になる。この方法を用いることで、他者の振り返りをいつでも知ることが可能になる。

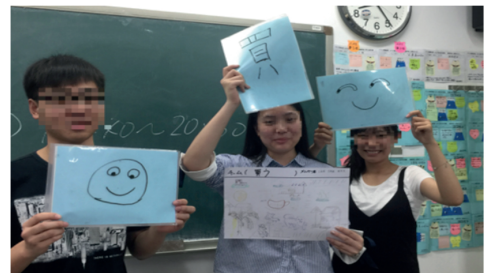


写真5(上)・写真6(下)

4. 活動具「フリップ」に期待できる効果

【「楽しい・好き」を活かし、自己表現に結びつける】

国際交流基金（2013）によると、中国の日本語学習者数は、世界でも最大の規模であり、その理由としては、実利的なニーズのほかに、日本のアニメ・マンガ・ゲーム、ファッションといったポップカルチャー、観光等の文化的側面が日本への興味・関心を強く喚起していることが述べられている。筆者の勤務校においては、ポップカルチャーに対する興味から「イラストを描くこと」を好む日本語学習者が少なくない。そのため、「フリップ」にイラストを描いてもらい、それを見せながら発話するという活動は、学習者の興味と日本語学習をつなげる試みだと言える。筆者自身、「フリップ」を使用しなかった場合は、積極的な発言を好まなかった学習者も、「フリップ」を使った活動があるとわかると、目を輝かせ、授業を楽しもうとする姿を何度も目にしてきたことから強く感じている。筆者は、「フリップ」を活用した実践を通し、学習者の『楽しい・好き』を活かし、自己表現に結びつける」ことの大切さを痛感した。

【大人数のクラスでも全員を同程度、活動に参加させうる可能性】

駒澤・菅田（2016）は、「フリップ」の活用は、「一人ひとりの自己表現が難しかった大人数のクラスにおいても、フリップを活用すると、全員を同程度、活動に参加させることが可能となる。」と報告している。また、「自らのことが日本語で言えたという「楽しさ」を感じてもらえる課題を設定することが、学習者の発話を促し、双方向的な働きかけを増加させることを可能にする。そこで、授業に主体的に参加するという「参画³⁾」の意識が生まれ、クラスを1つ

のコミュニティとして構築し、学習者がコミュニティの構成員としての実感を得る上での助けとなる。」とも述べている。

5. 今後の課題

「フリップ」を用いた活動は、今後もさらに応用が可能だと考えられる。現在、筆者は「フリップ」を「カンペ」として活用するという新しい実践に挑戦している。「カンペ」とは、「カンニングペーパー」の略語であり、テレビ放送等で、視聴者からは見えない位置から出演者に指示を出すための表示板のことである。

筆者は、学習者が発表する際に、学習者同士の相互評価を可能とする「評価表」を自作し、活用している。筆者は、発表後にとどまらず、発表中も聞き手の想いや感想を発表者が知りえる仕組みをつくることができれば、発表者は自らの発表に対する意識づけが高まり、結果として、発表者と聞き手の双方の満足度をより高められると考えている。写真7は、実際に発表する学習者に向け、聞き手の学習者が「フリップ」を通して出した指示である。そこには、中国語とイラストで「私は発表者を見ている。だから、発表者であるあなたもこちらを見て」というメッセージが書かれている。つまり、「フリップ」で指示を出した学習者は、「原稿のほうばかりではなく、顔を上げて聞き手のほうを見ながら発表してはどうか」と提案したのである。実際に、その「フリップ」を見た発表者は、苦笑いを見せた後、顔を上げ、聞き手の方に視線を向けるように心がける様子が見られた。このように、「フリップ」を「カンペ」として活用することは、学習者の「聞き手意識」の育成を促すと言えそうである。



写真7

【「働きかけ」の双方向化・多方向化を可能にする手段として】

講演会・学会のような場では、話し手と聞き手の関係性が二項対立の形式を採っていることが少なくない。日本語教育の文脈で考えた場合、たとえ、討論されている内容が、教師が学習者の学ぶべき知識や内容を選択し、その知識を与えるという一方向的な関係へ疑問を投げかけ、学習者の自律的な学習の機会や主体性を尊重すべきというものであったとしても、その講演会・学会の在り方自体が「一人が話し、複数の人がその話に傾聴する」、または、「数名が前に並び、それ以上の人数の聴衆がその数名の話を傾聴する」という「まさに自らが否定しようとしている形式」で進行されているのが一般的である。もちろん、その「一方向」的になりがちな形式を「双方向化・多方向化」する工夫が見られないわけではないものの、まだまだ模索の途中だと言わざるを得ない。筆者は、その「一方向」的になりがちな形式を「双方向化・多方向化」する可能性を「フリップ」の実践の中に見出したのである。

【ポスターセッション】

写真8は、「南米日本語教育シンポジウム 2017」のパネルセッションで撮影されたものである。筆者のポスター発表を聞き、『フリップ』をパネルセッションで使いたい」と言ってくれたパネリストが1名いた。そのパネリストは、実際に「フリップ」に「ワクワク日本語独学人」というキーワードを書き出し、さらに、イラストとハートマークも描き添えると、それを聞き手に見せながら、自らの経験や想いを語った。



写真8

もし、パネルセッションにおいて、聞き手全員に「フリップ」とホワイトボード・マーカーが配られていたとしたら、聞き手はただ「傾聴する」だけの立場から解放されることになったのではないだろうか。

そう筆者が考えたのは、「フリップ」が手元にあることで、聞き手は発言中のパネリストに向かい、「賛成」、「たとえば?」、「更に詳しく知りたい」、「?」等のメッセージを「フリップ」に書き、それをこのパネリスト同様、頭上に掲げて見せることが可能になると感じたからである。そのような意思表示の機会が聞き手側にも確保されていたら、聞き手側の質問や挙手でパネリストの発言を遮ることなく、聞き手の内面を視覚化し、パネリストに伝えることがより容易になるだろう。パネリストも、そのメッセージに応え、質疑応答を待たず、自己の発言を、より聞き手が知りたい方向へ修正するチャンスが提供されると言えよう。

このような「フリップ」の使い方が可能になれば、話し手が「一方向」的に話し、聞き手は「傾聴」という形で進行されることが一般的な講演会、パネルディスカッションの在り方を多少なりとも「双方向化・多方向化」させる可能性が広がると言えるだろう。また、聞き手同士も他の聞き手の想いに触れることが、より容易になると言える。よって、「話し手⇒聞き手」という場において、「話し手⇄聞き手」、更に、「聞き手⇄聞き手」というやり取りを可能にする。これも「フリップ」が持つ可能性の1つであると言えよう。

現在、筆者は、所属する中国の教師会・研究会において、「フリップ」の実践を実際に体験するセッションを設け、紹介する活動に挑戦している(菅田ほか、2016)。また、昨年からは、他地域の教師コミュニティ・教師研修にも出向き、「フリップ」の実践を紹介している。現在、中国の日本語教育現場においては、「実践研究を通し、日本語教育学について考える」という視点が徐々に広がりを見せつつある。しかし、実際に、実践研究を行い、日本語教育学に関する発表を行う研究者は、多いとは言えない。そのため、筆者は、教師会・研究会に参加する聞き手の理解を促進するためには、抽象的な説明に終始するよ



写真9

りは、活動を追体験してもらう方が効果的であると考え、実践を体験してもらう形式を提案している。「南米日本語教育シンポジウム 2017」の発表は、その延長線上に位置する挑戦だと言える。今後もこのような活動を継続し、更に「フリップ」の日本語教育への新たな応用と可能性を考えていきたい。

〔注〕

- ⁽¹⁾ 国際交流基金「2016 年度 海外日本語教育機関調査結果」の記述に拠った。
- ⁽²⁾ 国際交流基金「2014 年度 海外日本語教育機関調査結果」の記述に拠った。
- ⁽³⁾ 本稿では、「参画」を「自分が参加しているその場自体の『場づくり』すなわち、『授業づくり』に参加する
勇気と手間（コミットメント）を必要とする（林，2015：2）」ものだと定義する。

〔参考文献〕

- 池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門：創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 国広哲弥・堀内克明・安井稔編（2002）『プログレッシブ英和中辞典』第4版、小学館。
- 国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状：2012 年度 日本語教育機関調査より』くろしお出版
- 駒澤千鶴・菅田陽平（2016）「中国の大学日本語教育における「フリップ」の活用：日常のクラス活動からワークショップ型学術発表へ」『言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム 報告集』[kindle 版], 検索元 [amazon.com](https://www.amazon.com)
- 菅田陽平・駒澤千鶴（2016）「中国の大学日本語教育における教具『フリップ』を活かした教室活動」『言語教育実践 イマ×ココ』4、ココ出版
- 高久啓吾（1998）『新しい体験学習 1：楽しみながら信頼関係を築くゲーム集』学事出版
- 林義樹編（2015）『ラベルワークで進める参画型教育：学び手の発想を生かアクティブ・ラーニングの理論・方法・実践』ナカニシヤ出版
- 国際交流基金会 日本語教育 国・地域別情報：中国，2016
[//www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/china.html](http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/china.html)(検策 2017 年 11 月 29 日)
- 国際交流基金会 日本語教育 国・地域別情報：ブラジル，2014
<http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/brazil.html>(検策 2017 年 11 月 29 日)